

2013 年度監査意見（2012 年度決算案および 2013 年度予算案）

0) 重要な前置き

組織の会務に関してのチェックを託されているはずの監事に全く連絡も相談も無く、第三者委員会の設置議案についての議案の提出が行われた。このような議論があったこと自体も監事に知らされておらず、極めて驚き、遺憾に思う。監事の職権と立場とがないがしろにされていると感じた。後に運営委員の総括文を読んで、経過を知り第三者委員会に求められていることが理解され、課題が現監事の力量と役割を越えるものあると思われていとは理解できた。しかし、上のことは、今後も監事の職務の範囲がどのようなようになっていくかに繋がっていく極めて重大なものである。監事の職務の及ぶべき範囲について、運営委員会と監事との間の共通認識が必要となるであろうし、それ以前に、これは組織全体として考えるべきことでもあろう。

今期の運営委員の総括で、實川発言・文書は「腐敗」の例の一つとして監事人選の経緯が出されている。これでは、現監事そのものが腐敗した中から選出された腐敗の産物であるかのように読めてしまう。

他方、この監事選出の問題点の指摘は、次のような事実も明示されなければならなくなるであろう。監事の選出は、滝野・渡辺両氏からの申し出があり「暫定的に」なされたとされているが、これは正確ではない。二人からの「申し出があった」とされたのは、一般通念として運営委員会からの依頼は出来ないという事情によるものであった。「自ら申し出があったことにしてもらいたい」との運営委員会からの依頼（これに直接尽力されたのは實川委員）に基づくものであったのである。運営委員会が推薦するのは不適正であるので、このような経緯で暫定監事を了承したということが真相である。これにはさらに、2年前の総会の時点で、運営委員の選出時の困難や問題に気を取られて、監事の選出が失念されてしまっていたという事実も付け加えておかねばならないだろう。

昨年の東京大会で遡及的に了承を受けて、組織の規則上の整合性は保たれているわけであるが、運営委員からこのような発言を受け、われわれとしては、監事職の信任が改めてなされる必要があるかと問いたいところである。

以上の前置き事態が異例のことであるが、以下の見解と発言もこれまでとは違ったものになる。しかし、これはこの組織の現状を憂い、その脱皮の願いを込めながらおこなうものである。

1) 有能な人材が集まっている運営委員会であるにも拘わらず、集団となるとコミュニケーションの仕方や対話の仕方がトンデモない方向に展開している。この事態が組織に与える損傷や会務に及ぼす支障を各位の深い自覚と反省に基づき、この事態を打開する方策を求めて、現状を根底から見直して貰いたい。

発想の上での根本的な見直しが求められるとしても、実際の行動レベルでの展開は慎重になされなくてはならない。組織そのものを崩壊させる大きなリスクを伴った革命はしないという選択であれば、現実の条件下における最善策を取りながら、さまざまな工夫をしながらの刷新になる。

2) 今期運営委員会のさまざまな活動は、多くの葛藤を生みながらも、いくつもの刷新が行われたことは事実であろう。しかし、委員会内部での議論は、勝ち負けの話し合いになってしまっている印象を強く受ける。一人一人話すと素晴らしい人であるが、集団での対処となると自己破壊的は動きを生み出している。事情を全く知らない新しく入って来た方がその様態に接すると異様な緊張感と不安感が伝わり、「いったいこの学会はなんだ？」と感じて、近寄りなくなってしまう。これは新しいメンバーを歓迎して行くべき組織としては、極めて重大なことと考え、対応の改善を真剣に考えるべきである。

(実際、この学会のやっていることに関心をもった方に、学会に参加するだけでなく、総会にも、誘って来て頂いたが、総会（前回定期総会）の議論に様子にひどく戸惑われてしまったということがあった。その後、「このように忌憚なく意見を交わすのがこの学会の特徴であり、良いところでもある」という説明も受けたのだが、「あの雰囲気は病的な感じがして、もう近寄りたくないんです」と、他のイベントの参加も全てなくなってしまった。T)

3) 「総括」文を読むと、必要な議論において、電子メールをどのように活用していくのか、ということが大きな問題になっている。議事にはメールを含めてできる限り多様なチャンネルを使うべきだと思う。媒介によって長所と短所があり、文章の中だけでやると多々不備も生じる。いろいろ試行・錯誤でやって補足・修正しながらやるより仕方がない。是非言いたいことは、「試行」と特に「錯誤」を了承し合い、お互いに寛容でなければならないということ。メールでは振り上げた手を納められないということが起きる。文章で出すと一貫性を保ちたくなり、そのまま主張を通そうとするので、折り合いがつかなくなるし、感情的にも追い詰められて合意への道がさらに閉ざされる方向へと向かう。運営委員会の ML での議論を見る限り、誠実さは十分ありながら、話し合いの方法に関しての未熟さを感じざるを得ない。

4) 以前から、この組織の文化のあり方を憂い続けていた者として、監事職を引き受けることで、組織の話し合いのあり方を根本から見直すために、OST を取り入れようと努力した。昨年 8 月の東京大会では、粘りに粘って最後の数時間に OST のほんの一部分を紹介

介する程度のものであったが、全員参加の対話の場をつくることができた。この精神をもっと以前から、そしてその後も徹底して学び合うという雰囲気であれば、今日の事態は違ったものになっていたかもしれないと思う。T

5) 昨年の東京大会は、扱われたテーマもよく、予想以上の人も集まり、久しぶりに臨床心理学会の素晴らしいところを観た感じがするという感想も聞け、内容的に充実したと言える。その後の関西での2月の公開シンポジウムでも、社会に臨床心理学会の在り方を発信できたと思われる。これらの成果を今後にもつなげてほしい。T

6) また、殆ど不可能と想われた大連大会が挙行できたのは、大変に評価できる。酒木委員長他の関係者の大変な尽力があつてのことであつた。今回の経験を踏まえて、今後も続けて発展させていただきたいものと思うが、同時に、多くの課題も見えた。T

7) 事務局体制の整備と会計の業務に関して。今季さまざまな事情で、これを戸田さん一人で背負われて奮闘された。戸田さんの前には、高橋晶子さんが事務局をほとんど一人で担い、大変な犠牲を払った努力で奮闘されていたが、組織としてはそこに既に多くの無理があると思えた。事務局でさえ、今までのやり方ではあまりにも個人負担が大きく、超人的な特別な人しか手を出せないことになってしまっている。これはできるだけ多くの人が参画できる集団であり組織を目指すこの会に原則にも反するものであり、早急にこの体制を改善すべきであろう。

8 予算案の運営委員会活動費について、現在の立候補者数に相応する予算額を暫定的に計上することにした、ということを知った。W

終りに、

運営委員の総括文に刺激を受けて、特別な監事からの意見となったが、上に書きつらねてきたことと矛盾することになるが、最後に敢えて付け加えておきたい。運営委員の「総括文」は、この監事の意見も含めて読んでいただくことで、全体の理解が深まると思われるからである。

監事の一人からは特に次の意見が出された。本来、議事録等、会員への公開文書は、簡潔にまとめるべきということである。通常、会議議事録は、箇条書き等、簡潔で分かりやすい記述でしか書かない。公開文書として、運営委員会内で紛糾した内容や経緯を逐一記述することは適切ではない。運営委員会内部でしっかりと検討した結果だけを報告していただく態勢に移行していただきたい。運営委員会議事に興味を持っておられる会員にはよいが、一般会員は、議論の詳細な過程報告を必ずしも求めていない、と。

これに関しては、逆に、透明性こそが組織の健全性のために不可欠で、少なくともメンバーには全てを公開にすべきという正論もある。しかし、弱くお互いに支え合わなくては生き残ることさえ難しい組織の場合や、しかも、それを取り巻く環境の厳しさが尋常ではない時、事態は全く違うものになる。

文章は、それがネットに乗れば、全世界のだれに読まれる可能性もあり、その一部分が独り歩きする可能性も考えなくてはならないはずである。その文章が個人のプライバシー侵害や、誹謗中傷を含んだものであれば、その扱いは一層慎重にならなくてはならないのは、当然であろう。

(Tとあるものは滝野、Wは渡辺の意見を示している。それ以外は両者共通の監査意見)

2013年7月26日 監事 滝野 功久

2013年8月 3日 監事 渡辺 三知雄